繪本豐臣勲功記

四編

五

繪本豊臣勲功記四編卷之五

目録

山崎長門守刀祢坂戦死

屬 能島生害

義景自殺信長越前平治

屬 久政自害

長政最期浅井諸士勇戰

屬 昭坂澤參

藤吉郎合情再興京極家

屬 黒田使節

繪本豊臣勲功記四編卷之五

江戸 櫻澤堂山 編輯

山崎長門守刀称扶戦死屬 瀬興最期

荒食迫る時ハ。その疾事矢の傳く。仇を逐ふ時ハ。その速さこと鉋の傳しと謂ふ。今義ふ信長ヴ義家を逐ふ勢ひハ宛鉋矢の疾ふ似たり。然バ朝倉義景ハ月ヨ家ゝ退去なせしが。都ヶ瀬村ふ来りし頃ハ。漸く人馬労ヒて。疲時ハ休息さ在後地を治合さて。遠時山崎長門守。大將義景の前ヨ出。今更勇さも論ふけれど。遠遠ハ小ハ帝出馬ありしハ。帝運の傾く隨相なる為ー。小谷已ふ敷賀ふおいて。い病く。誠言京ハといへども。帝用ひなくて已ハ。ふ只今雅義の退治ふ歓兵大勢已近くと後ふ迫附い得べ吾昌

く退去ハ謝まず。潔く一戦す。戦死せんこと武士の本意さハさう
なれども大将ハ少しも手負ハず退遁ハ小臣ニ不堪止ル。防戦して
君の為に甚くしく戦死せんその際ハ。時剋をうつ〳〵まうけ。
急死ハ城内ハ退入ル。数代住居の城ハ。心寧く脱めされ
よ。決て遁ぬ時節なるハ本城退さゞ〳〵て。後の笑ひ残東
さぜるハ。所謂諫めまうすも是ハ。情や今生の所捧別ぞ。
所運の末とハまうしながら。是まで多く扶持せ〳〵老甲清代
の長家といへども。所大事の朝ハ。君の幸うなのが身ハ。
遁る〳〵場所ハ漂泊て。恩我忘れ恵を思ハ。情ハ人の為ハ孫
ども。後論の倫輩我のを。愚情軍くせ〳〵。蓋めるのを扶持
ゆるの為ハ。今此危急に及ぶと雖ども。一切もその甲斐なしこと我。

〳〵思ひあてさるべし。と雖居兵庫。寄橋基之弟若を膝ハ聞
殺義龍興に含称して本城の程近謂了。時剋うつ〳〵多うう
ん。速く落さゝ申へうと。就為のうへ馬代ハ。むけ。自分ハ道の
正中ハ退来る敵の今ハ。やと。馬を急くで待居る。今山清が一
言ハ。激忘せ〳〵踏止り戦ひ者も多うりける。雨居。寄橋ハ赤面
して。主君ハ引潔ひ為ハ。月軽樹間を穿つ。是も歌かと
慨数寄。胸裏うせ〳〵奔走をけり。彩て織田の大軍ハ。ふんぐ退
る程ハ。こゝや力稲坂ハ独身なり。信長ハ。つか〳〵諸勢を厚ま〳〵。進
めくと所ハ。あまべ。若田又左衛門俊正ハ馬を逃らせてこゝや朝食
の後陣ハ退附。二三ハ攻附られを。朝倉勢ハ右側左翼〳〵崩を
なるそのところへ。山侍長門守右家同婿ハ小次郎右嗣同苗七郎九

合戦坂ハ新本瀬より西ハの方に書りて記別の本源より一里程右数寄彩ハ

清つ右廷同新右清門右重第。既に義死と覚悟して。後陣へと向て返
し。くるを。見る同志の面々。和田三郎左清。義成同清左清。義綱弱
冠将監右廣。神波九郎右清。同久盛田弟書右清。同七郎左清右
房。山内弥六左清。三和清六郎左清。清水三郎右清。岩傍忠左衛門。本
田忠左清。猪井五郎左清。田尻十郎左清門。右尻又七郎。西偏長兵衛尉。遠
兵五百餘人。日根坂の上に立塞り。退来る敵を待覓たり。織田方の先隊
虎嘴をうて一噴に坂伝紅蓮を伝。先一番に山傍又五郎。正先に地下三。
をばく敵伝ゑくをもせず。突ゑくし。必死の戦先験に拒く。先
に進をし織田の軍勢。たちまち坂より撤退され。ををく兵士最多
けをべ。新手伝いをえ攻るに。山傍又五郎勢ハ崩山遮海の如くにて
合を期と搦れる也。織田勢猛く繞めども。波濤の険をよろう。

禁のうへ退返さる。先隊の大将前田又左清。佐々内義助。其外の諸
士是伝刀をく。彩て退殿あるに。敵ハ退歩の疲武者自方に比
べれば十分一なり。さるの地に利を得たるとく何程の事かゆる
べきぞ。吾倭に続く覓きくと。独華伝懸まし。勇を振て攻よる。
前田又左清。利家。恩慮伝廻らし。鉄炮の兵二百人を正先に立て進ん
だり。此時朝倉の勇士和田。弱冠神波清水。山内若。山傍父子に猪
隊。備を立るその所。前田ゲ進めし鉄炮隊都。二百余挺の筒先
そ揃へ。雷雨のぬく乱撃せうへ。朝倉勢ハ面を向る。たゞよふ所を
利家成政。さへ突登ると呼そろく。両将さうう先に進る坂の絶
頂に馬伝立る。弱冠将監右廣を前田利家又るよりも。一聲
呼て突覓り。只一鏃に将監伝。馬より下へ突て墜し。首掻斬く

前田
拔駈し
刀祢坂の
一番鎗ホ
鍋淵
將監を
鎗を

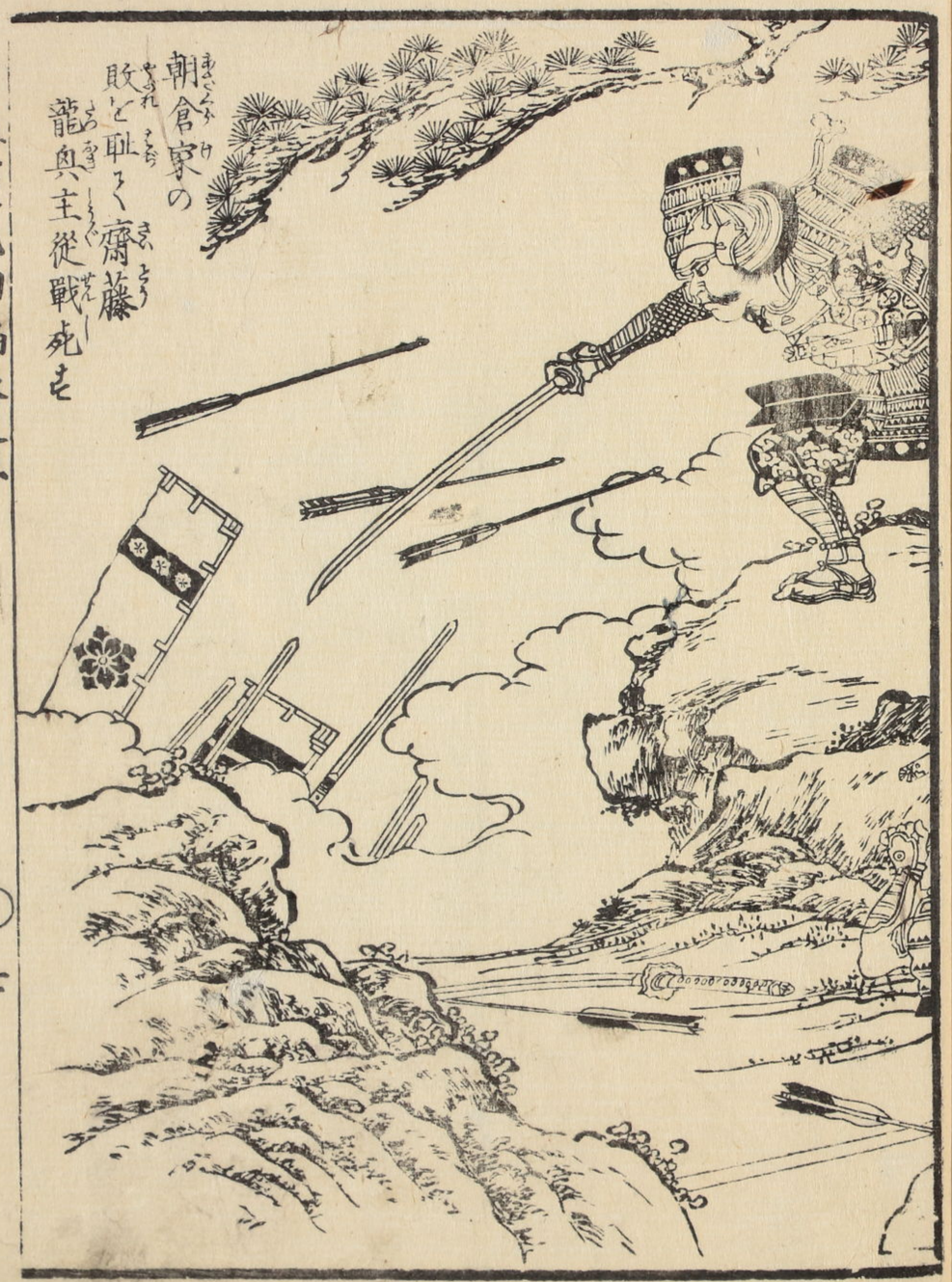
るく發揚。追撃の一番籤と呼さきべ。依く成政見伏見て。おくまで
ものと跳蒐り。和田三郎左衛つ伏う。此國ふ奈て面將ハ。掛紀新伏
羅うく廣場へ絶登る。獅懐虎怒して戦ひ名れを朝倉勢ハ大ぶ打
れ。山傍父子も渾身を血鑛にして喰止たり。本下。柴田佐久間明智。
丹羽。蜂屋。氏家。稲葉。蒲生。阿閉。永田の門。次第くふ推進ふる。本
下義右郎秀右ハ。遠隔の先を征たりしが。彩のぬく陳遮てハ義系
主事ふ引退紀。防戦の准備なをあらで。容易政投こと難かりん。速
に追撃して。防戦の准備させ。ぐと。山傍俊が防路を。和田佐に
信せおこ。自隊の兵士伏部合せ。ちを破つく絶通る。花が如くふ
追行る。氏家左京亮見伏見こ。同ドく自勢を一ツふ。本下の
後ふ續いう。背場に山傍祥波俊。百猪ご猪ふるまでも。一寸

後ハ退ーーーのをと。滅多斬ふ乳敷ーるがおのく後石ハ月ゆうね
で。かりふまくふ烈戦して。一人ものこらず戦死ーける。朝倉義系晴
弱ゆをども。先祖累代の名家なるを為其風見まを連續ーー先
急に落そく主伏助るふと彩のぬー。義景。都の道伏ふさべ容易
滅亡ゆうまで紀ふ嗚呼惜むべきる。斯て山傍俊の戦系
武士ゑを力稱扱ふく戦死ーれた。織田勢も夜中ふ遠追に
労を始く為に休息して再び蹟を追征たり。本下義右郎秀右
ハ既ふ力称扱を征伐く勢ひたけく進む。朝倉孫二郎系健
同玄佐為。同掃部助。同庚四郎。河合安藤為。宅見紙系為。伊藤九
郎を清。小泉四郎左衛門。長傍天系坊俊捉く返ー。本下ゑ兵ふ操合
ひ。右愛左紀して戦ふたり。秀右ハ只序時も先ーまくまんとかりふ傑

氣ありて元来その場にのぞむ時は水火の中も拔破を通らでは休ぬ剛勇なれば自軍の諸士我もげまゝ競め。単騎急に指揮を傳へ。うゝ正魁ふ狂なる四郎加藤福島序桐塩尾一騎當千の勇士等我劣らじと論を合せ中に就く後藤市松正則河合安兵衛なる我殿提を見におとらで加藤虎之助清正は宅見我家なる我殿提たり是を名の叛として序相助紙。塩尾義和中村孫平次浮須賀又子徐骨我粉ふして戦ふにて。朝倉方の名達る勇士員を盡して戦死せり然るふ氏家左京亮は木下に續く弛たりなるがよくく共今退附しに此戦相を見るよりも。猶勝なせじと撃て蒐る。遠に濃州前の国守砂後治部大輔就興は一百年前より。朝倉家に身を倚しが。義京殊ふ是を愛し。業能歌樂に月日送りぬ

然るふ遠遺義京が退去に及びく。柳ケ瀬へ着る時。山徐長門守右家。主人を剛諫守る間ふ。主盃の者我原く扶持守。発急の勢ふ及んぐ。我身の上に迷惑して。主君の恩澤を顧ざると。誹謗せらまて一言の。能興が物に行さしごとく。猶てや孤後ふ長井年人は。主忘に傷も羅断ぞり。洞を呑居在たりしが。義京の退去ふ誘引く。力称坂までは退さまども。諸士貪婪に濃人我死しなる我ふ人ふつけ。長井年人は。能興の遺ふ轟と拒着。あまこ爾を也。人は一代名は末代。抑右衛主従は本国義濃を退去せしなり。遠那に漂流して。他人の扶持を稟る餘。暮び家名を奥さんためなり。熟く結果を慮るふ。所詮再興の力は堪ぞり。切て武勇の名なりとも。儀して死後の恥辱を雪ぐん。数度徐言稟

朝倉家の敗と耻く齋藤龍興主從戰死せ



たとへいくども。名頭帥受用まし〜まさぐ〜して。剄戈朝会の威勢ふ
過り。忠義の武士はそやそでに。義死ふ〜果らるゝと。実ふ哀傷不
見あり。先刺山陽が柳ケ瀬にく。悪せ〜河伐ぃぐ所取ゆふぞや。小
臣ハ徇も裂さく像く怪念骨随に徹しに。変ても運命拙ゆ死所
身の愛を遂き他国へ行とも。暮び平安の世に遇ぐこ〜と怪会の
泪ふ血を灌ぎ聲放ちく懇嘆しられた。龍興も目宵を敵死。よく
く武運ふ盡たる身あり。いざく時ゆる軍して。自方の耳目を驚
うせ。愉よく我死せんと。勇氣壯んに悪されるをべ。長井隼人ハい
とうをしく。その勇猛を含ませたるつぐ。るふ然ふる事ハらんと。
主従二人に。士卒を合せく十四人。氏家左京亮が軍中へ斬く投
来西ふ掛く池せ。南ふふ狂猪。當る伐よと血我に。氏家が自勢三

百余人。安藤主従十四人を。圍くと接戦国を。刺をまぐ〜とぞ攻たり
ゝる。傑氣の龍興。方便を陽りの軍ゆをへ。数々所の疵を孫ともせぐ。
勇を振ふて戦ひゝるぶ。従卒こゝく我死して。主従二人となるしろべ。
長井隼人もたゆ見まぐと。龍興に自勢を勧む。こ〜ハ〜うと曰よ
り逃却り。上帝解くせ〜〜〜くも。礼軍の中ふ切抜去られば。隼人ハ
るゝ〜分借ゆ。その身ハ敵中ふ池投て愉よゆふ我死しゝうこに
日根野備中ゆ同弥次右衛門兄弟ハ本下が隊ふ属しけるぶ。義京に
を遂去の中に。宮く龍興も奇一に。おゝるゝ人。此戦中伐必事と
退去まし〜ませ〜や。いかふもゆて値遇。主従を使ひ返らんものと心伐
苦しめて河りゝるぶ。先刺秀吉正魁へ近抜たりし伐婆便ふ引殿を
もゝふてかひ来たる。木下勢ハ最先より。河合宅見が聚と火水にるう

日根野兄弟
龍與の冷體を値偶く悲哭す

て拵え合。氏家ハ敵義龍興が。十四人と接だりなる由。日根野兄弟と八幡町かど踊躍してありなを。神なるぬ身の見を知らで。左右ふ歓ぶ。そなる戦死しとそれ一戦ハ休なれば。自軍の諸士俗そをこぐふ。提なる首級をふく提げ。一所ふなさんと持集る。其中に氏家の郎当宮門組馬とのへる者義龍興なるびふ。隼人が首を持来る。氏家も原ハ敵義家の旗本なる由。二人の面神を見知たをば。左京亮是を見さに。義龍興主従に遠ひなをば。今更哀の事ふ思ひ。木下ふ斯と告ける。にぞ日根野兄弟此由を聞と。急しく。狂乱のぬく情深られを忘をて。純糸り。義龍興主従が首を見るまり。了得の兄弟。歓湯の涙を泪流し。たちまち五体を地ふなげうち。聲を放ちて嘆さなるふを。彷徨りなる兵士輩も。兄弟が心中を察し。涙の袖をぞ絞りける

義京自殺信長紙茶平治屠久政自害

親縣巨海小魚鼈を呑ハ是その膏油を養さんがなめり。ゆく織田彈正忠信長ハ弊ひ恰も彼竹の傍く。接に接て退撃ゆ。敦賀まで迎極なる由。その疾こと旋風の傍く。をこ〜も虚陳ふりしゆ。義京敦賀にも止りゆ〜。そのまゝ本城一条若へ纘くふりて退入けるこをにより信長ハ力を労せず。備軍残徑く。敦賀の城ふ押入ゆりのまゝ酸提藏級を茶波九郎兵衛清に見ふ。一〜姓名を記させく是を實検あるをら。一夜日遁間ありて。人馬の労をを補せ所帰陣のすを宣ひ〜ハ木下秀右大ふ酒瑞。御帰陣ハ是底事ぞや今や既ふ朝倉義京滅亡ゆるとぞ。ふ聞ふして。我若一国をを純ふし東宮紀時節到来せりそをを見より帰を知ゆ。義京再ひ敗亡を聞

ひ要害の地ふ防禦の準備し。容易攻伐事かたし。方便遠威をもて攻めふ事舟の水戦行ぐ如し。早く乱入し玉へうと。強く進めまいらせなきべ信長首をかたむけ給ひ。然どもうしろふ淺井父子あり。先決謀を延引して其後戦策ふ攻入るべし其義いまとうも所心ふうけさせ給ふ事なれ。既ふ小谷ハ家撰して。淺井父子をかこみかくこと籠中れ者の像くなり一月二月當國に。所在陣まゝ法そとも。氣頻ハしたこと更に。頃さ義京出陣の朝より逐殿の事心にあるべ法場の守護もよく計らひ。才小一郎秀長に行中宋長清重治を加副虎御前山ふ陣備を立させ其外少年若信忠公の御旗本伐丁野大嶽者に凝ちゝせ給ふ。能く言上し。重治ハ加之重治ハ軍慮に賢き傑士なきべよろしく計らひまうまじし是者の事に

御心ふさぐ。乱入の御准備ふ。信長諾受給ひ。然べ是より本城ふ推進しと陣備せられ。十八日に敦賀の城を所立ありて。府中龍門寺に御陣をとられ。柴田ふ下丹羽氏家。稲葉安藤の諸将をもりさく。義京の伐陽ふ法ふさる。備も朝倉義京ハ一京若に入るといへども。一族老臣こるさべく。遠而那所ふ戦死なし。扶くる勇士ハ一ざきべ。宰城攻もかるひざしと圍ふ諸将を集め。いくさ議しと辞儀しるふ。朝倉京鏡何思ひけん。おのが居城大野郡勝山の城ふ退入なと勧めたり。義京外に頼そもなけきべ。預く山傍者家が。最後の法言もうら忠臣妻子従類連続て。一京若を退去なり。大野郡ふ為行なるが其夜のみれ刻なる須大野郡勝山ふ迫さ。冬雲ちに為着。使者を平泉寺ふ法ふし

六時房中ゐ
わいく
朝倉義景
自殺す

て。頼む為によりいひ入まゝうとも。いつゝ衆徒等も歌とりて。義秀を殿んと計まをるもあまたゝ恐怖し。深雲なるに祭居ふたり義ふ朝倉繕代の武士。勇俊紘有る京固。朝倉孫三郎秀健俗名をもとめく降参ありれば。朝倉武部亟秀統も。その下人ゐるの石へ稲葉伊豫入道一徹。密ふこのゝを听出し。累統が方へ使ひ送りつく尚義京を殿く出なた。恩賞莫大なるべきよし。京遣ゝ〻ふり。渡りに舟の心地して。義紹のゝ伐逆者なり。同十九日に黄昏時深雲なへ使者を送り。其地ハ往来遠くして俄義便りあゝまを。今宵ゝ〻中に山田の庄なる。六時房まで御搬あるべし。よろしく思慮を言上ん。と。京法ゝ〻なるにより。義秀のゝ〻ろも法ゝ〻さつふ隨ひその夜のうちに。山田の庄へ搬りなる。翌廿日武部亟ハ平泉寺の衆徒と謀ゝ合せ。数百人の名をとりつく。六時坊を推捉因。後先ちゝけさびゝく攻法け。使者を義秀の許へ送りて御運もりも。や見まで。なり。急ぎ御肚めさるべし。とまうさ伐義秀大ふ驚る伐諸ハ一族京統も。信長のゝに属せゝ。是非もなく次第なりと。始て山法者家ゞ。最期の体言を思ひ出さま。後悔されども今更後なく京統ゞ変心伐罵り恐る。ゞ十一才ふく自害せゝれ。果ら是なるこそ哀れ。無むべし京統。背肉を徒の義を忘る義秀滅れて自害させ。その首とりく降参なゝ府中城門るの御陣ふ来り法長へ聚奉たり。信長即ち義秀の首級をもりく。京都へのがせて獄門ふりけらま。既ふ義秀平定ゝられた。國人寺社等ゝ〻て帰路ゝ。信長ゝなりて京統ゝ不忠不義を悪ませなひ。深ゝ〻とありける伐

秀吉深めて密語をこらく今當國一國ふ所領に入るをまつしかるべきを
ざ全く靜謐なるべし。必定再び騒動あるべし。然るふに別一國に平治せ
ばしてありぬるを。其士をあまた當國に殘さることもなりがたし。況や其
士のをふくに國中の仕置惣ぜいざるを。奉行もなくてに治ふまじ。是すべく
甚危きことふ出般降参せ〜家へ。貪是不義のやめがたれども。去ぬ
く孫をゆるすーおろを恩賞なりと命せ所らを當國中を配かして隣人
家へ信せおろを那搬〜に命ドをいぐ楽倫喜んで受領をさんかるべ
び極なく爭ひ起り同士お發動法なるべ。自滅を引出まうべし。その除
にるぶ者に別伐全く平治ありなひ。根を固めを強ふ〜おりて當國伐
征伐わるべ。災をして歎ふゆべう。降参後をしく自軍に得せしむ。此密付を
沛心に偖をせゆふやいふといを。信長怪りの使をしさふ。これを忘れて

声を發し。神妙不思議と言ふ。秘して他ふいのうさでりけるを。やがて
國中を巡ぐふ政事を作せ法さを。まず筑波者継ふ最初ふ降参る
をけさるべ又軍功も大ありとく筑波の苗字を賜せらを。桂田播
磨ちと授令かさ〜め。信の一字を揚をて信俊とあらためさせられ。一國の
ち後をわつう。一系若ふ住〜め。富田弥六郎を府中におき。急使筑前
ちに是羽を領さを。海は大炊介ふ。金澤を與へ。名倉京鏡ハ相替らべ
彼山の城ふおうせらを。ハの庄ハ國の中央なれどとく。高倉三奉行
の格伐りつく。津田九郎次郎。其下助左衛門智十名法此三人を奉行
とーく。北の庄に付さ〜おうれ。預め仕置の所法相調ひ。同月廿六日
をりく。再び江ハ所帰陣ありぬ。虎御前山ふ所入りぬ。今般戦者を
政取く名倉義京を滅〜たりし。その勢ひ。利力の行を彼るる如くふの

たり。浅井ども、つく。見へくるしたゞ。浅井の滅亡到来せりと。小谷の備亡者恐怖して。生る心地いさらふゝく。防戦の働もあゝざりなを。重て奏古ものらんて。舎弟小一郎に作中まを諸を補佐おさゝめ。一子余人の兵をひきく。京極法ぶつ一刎入させ浅井父子の居所を捉截。厳しく隙成させ。こゝ。通路自由なるゝべしてと自然と網中の魚に者くこゝまを小よつく終会が。逃殿せらる。浅井ども。救ひえびしていさぶらひて。城空しく。暇在に。なり。終るふ。其下義者帝ハ。城前より帰るやいなや。信長の命を蒙り。そゞ。自勢を引率して。分秀長と一隊に。すゝ若の城を走下小見て。暇息の間小攻刎に。いきかひを後くはせるるにそ。てを守る大将ハ。上田左衛門尉。大野木左衛右人なりしが。織田に猛威に怨怖ゝ。曲輪を撤して陣参るるて。よつて信長備将に指揮か

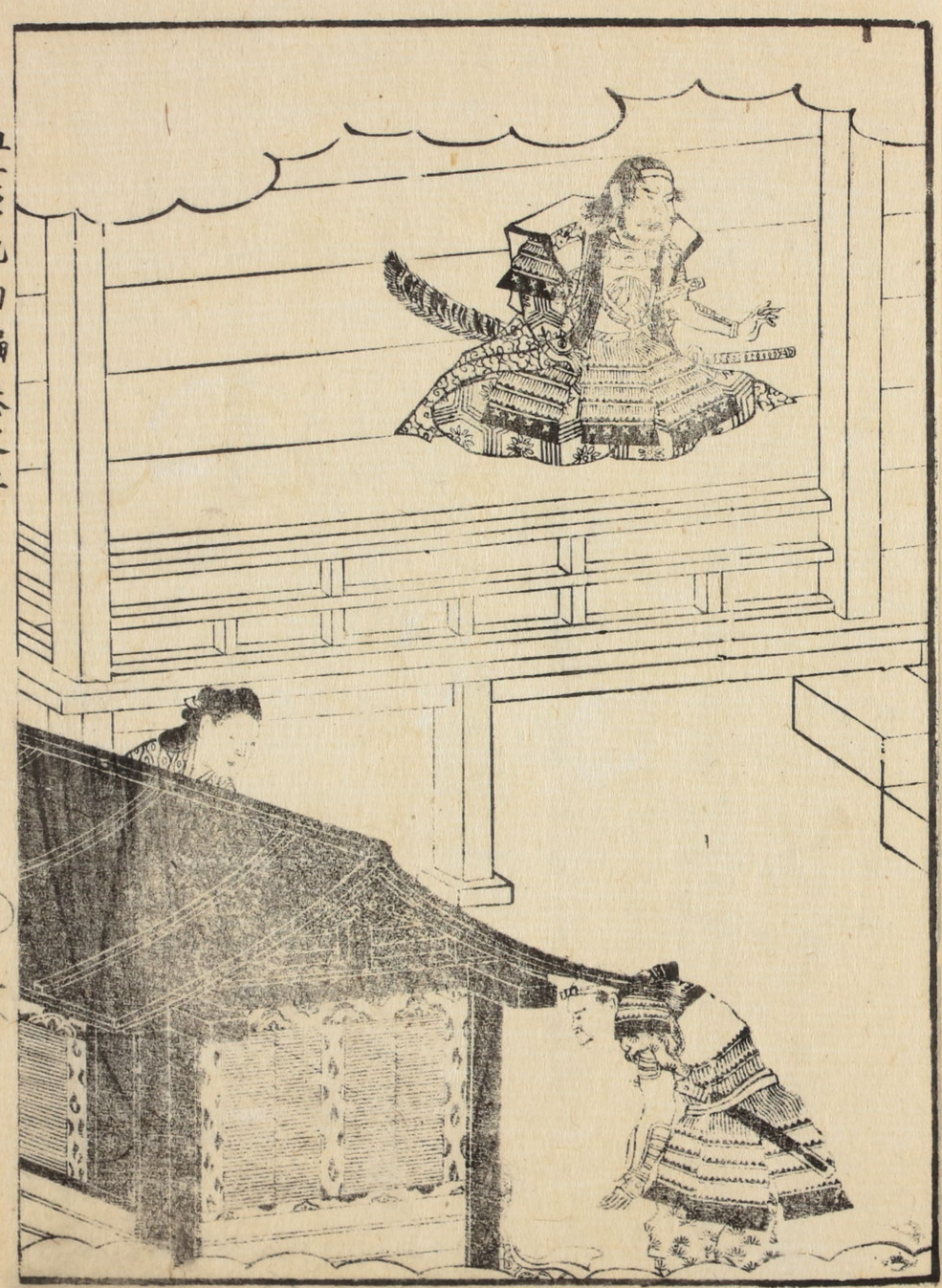
し。小谷城を一畫夜。休息もせゞ攻立させ。帝旗本の御勢をまで。京極法ぶつ一取上るひ。諸士の陣くを眼下小見御しに指揮さるまゝ。なりなり。終るに浅井下野守久政ハ。自害。城亡のやうを成間。今ハ防禦も何うせん。速に自害して。士卒ハ囲若を救ふべしとく。木野左馬介。上田宗女四西山丹右衛門。井口弥兵衛ども。防戦射させ。廿八日申の刻。陽座四会にして。腹十文字小かきさ。九日木恩義を蒙りたる。薬師寺弥松を夫とり。忠信剛氣の者ゆりけるゞ。命せを受くるひ。ぐ。介錯ゆ。まつるせ。其身も共に腹切く。殉死をしてぞそそにける。久政自害をさくよりも。木野。上田。西山。井口。武ハ討死或ハ自殺。する悉く死失たり。夫より翌廿九日。まゞ焼せるぬるひより。長政が居所を攻たりしに。浅井個馬。赤尾美作。組坂長

内。木村左京次郎。濃井縫殿介同新四郎。中條九郎二郎。同孫兵
衛。いづれも名誉の勇士なれば。進退の大軍を殊ともせず。俺們最終
の合戦に。来孫なりと笑されどと。通互に機を合ひ。勇氣を厚せば防
ぎ。なるも兵。進退も殆政便。りてあまーてぞ入れにる。然るふ木下義
右衛門へ。頼て濃井の勇士と拠城甚内といふものありて。援釋なる
指せ一戦。迫る日の。戦場にく視たりし兵。万を將伝にるさまくか
りひ。今へ濃井家滅亡の時なんゆる戦。楽俗が宝も。うべを盡して戦
死せんが。恢勇士を失さんこと。最憾む所に事なきだいふもやーて
助命ふさせん。そもふへ主人長政を。救ば楽俗も戦死を。義び和
議を計らんと。信長に斯と若なる兵。大將も見ふ同じ見ひ。不破
河内右戦侯者こーて。長政の伴へ使ひされ。見まを合戦ふ及び一事

ハ。武門のなひ見非ふに義あり。義系既ふ滅亡に。俺別の事ふ先
年。手懇至して結親しなを。遠期に及ぶといふとも。御躁意
なるもる偉ふ。帰ば居不を逆出ありて。濃井の家名相續のこと。
切心ふ合選らを一なる。然かどふ長政ハ。所俗遁ふ兵と見期し於
若の方七備ひし。一男二女のありなるふ。ふ見ふも偽ふ殺さんこと。
有係に猫に情ふもわとく不便ふ。ふひ。いふ。ふ一く助さんあど
懐ふ悩まく在る不。信長よりの使者来りて。遅去の何を勧め
しふ。ふ孫便の方縁なりとて。不敢河内きにうち射ひ。を鑑彩
成果る身戦。猶無ふ。懇切に。市使者を揚る。宛に大度感悦
さるに餘を切り。然ども頼く期しれる義なれば今更命なりひ
めようび。運命盡て腔斬る。武門の常道なふ。恨さん。只惜む

ごとく一事あり。所詮いかゝべき欲悦なり。郡〻なる如く我妻は素信長の妹なるゆえ。現に一男三女を娶り。遠故子。偖ゆ遠らんあひだ。義然せく[illegible]。技勝しゆゑ。及支助命の恩ゆ務れり。足下よろしく添補して[illegible]。遠外さらふ[illegible]なり。とく。河内ち成返してのち。於若の方に若名れべ。室家懇懷かたりなく。同及同路の死ゆ隔ゆん。と帰つをさまく孫さく 謂らく。支人空しく死ゆで児事も活る門なるゝん。楽海をいるれとおがさべ。今の最期成歩して。児室を宵長ゆ亡城をも。弔ひゆとあるるに。於若の方もゆゆ郷され。漸孫心ゆりける。長政郡び義懸三河ちと。本村小四郎を禦衛として。於若母ゆゆ人を遣せ。信長ち伴一遣しなる。系破河内ちゆ快ゆ返りく。長政の麝城責状せ〻。信長暮び逆去の河城勧めさせんと寄ゆ所つ淺井の方より義懸。本村。於若

母ゆをち後なりて。遣り遣さされなるゆで。再報不破ち淺井へ遣さし。長政に命せるる。世ゆ。報も偽言まうゆ孫ゆ。栖家些ゆ疎意ゆうぶれべ。城を通ゆる所なり。単に狂く死ちを出。是城ゆゝを信長にも射面さべしとありなる。長政嘗く保さべ河内ち兵顔孫めて。媒とありし小原なるまをうくゝ料理まうゆ体で。既諸士達の命をも。救ゆ大将の仁心なりと。頻つゆ勧めるゆより長政ちだらく沉吟し。つを。ゆのり信長。恨なるまべ縁を結べ。兵るゆ又義義京。信義を達て織田家と絶ゆゆ。斯なりゆゆ事なるまべ。信長定めて又久政を恨まるべしと思ゆなり。備久政をも助命なりなる。我愉快出城さべしと。京さゆ河内ち義然なり。更なも長政久政の自害ありしを知らぬや。遠義ゆ主人の賢慮もあるん。問合せんと意属厥を麝しく立返り。主人に斯と言状しなる



豐臣記内編巻之五

ぞ。信長公も傷悼がられ。猶久政が自害を知らず。怒に堪て再戦すべ
し。又偽て父子共に助命を乞べきよし返答せよと再三不破を遣され。
諸士等に命下て指揮あるなり。長政出城せるに及びく。父久政の死
を聞ば狂乱すべからん。斬されも自軍も難危ならん。かの備しく防
禦の準備をせよと。攻門の諸隊へも令挨させ。隊備を攪さず御諸
ゐる不破河内守ハ城に投じ信長の命を伝へ。御父子共に諫略なく。熟
量ふべき旨を稟されに。長政も志かゝれバこそ先業彼等を助けんと
譜代の諸士にうち向されし。我績歎中に死を幸あれども。汝等忠に
存命なし。他国に往く奉公せよ。それこそ方便出城せることハ単に諸
士に換らんためなり。返さぐも栖家父子の。生死ふ心を残さるゝなと。
最懇に言謀さまし。出城の準備をせられたり

長政最期浅井諸士勇戦属掬坂降参

牛ハ大にして猛なれども。死を悪むが由ゑに力を怯る。羊ハ少にして
柔しといへども。死を怖まさるが故に屠所に臨んで従する事なし。
浅井親爺是に比する不義京ハ大国に在たまへども。牛の死地に着が
像し。長政一国を領せざまへども。死をのく潔ふする様ハ羊の屠所に
赴むが像し。然ぞ遠貽九月朔日。浅井備前守長政諸士を救命なさ
しめんと。百将をめりにく出城なし。信長の本陣に到らんとせる旨
ふ。久政が従士他来り。野州候（下野入道久政なり）にハ一昨日既に御自害ましく
たりと最期の次第を告るにぞ長政大に驚愕なし。諸ハ父上運を
尽極め。御自害ましくするや。それを秘し我を欺き。殿んとし
ける非義の信長。敵の隊に落誅せられなど。末代までの恥辱なり

遠家切腹さべき色を。敵を防拒む度〳〵なく。家軍赤尾美作守ガ宅に組投。遠駒濃井家譜代の勇士。濃井但馬守。赤尾美作守ガ坂甚内。木村右郎次郎。中嶋九郎次郎。同弟兵治郎。諸士。主君長政自害の際敵を待せ〳〵と。臺たり。遠家ガ戦ふうち。長政赤尾ガ家において心静に切腹なし〳〵。果らきるこて最惜け是。百有餘人の濃井の勇士今は猶ほ頼そこて。命を惜むこと思ある。心の随ふ戦ふく。戦死せべしと呼ぶ。嘆り。敵方の敵中へ懸く組投。第後左右に掩敵なし。勇力猛氣の清ぐくたけ一足さうで突戦に。然ふ木下義右郎ハ。長政出城と呼ぶ喜び。信長対面あるふおいくに。絶命久政自害の事顕はること。孫宥めく。孫命させんとおりひ〳〵に豊料んや其期に及ぶべ。事露顕〳〵て長政自害〳〵。諸士ふる戦死の面ぶ。ある戦

視るより。諸ハ脇坂甚内も。遠戦中に切りなんものと。我隊の勇士に稟御め。那般との敵ふ値ふべ。よく姓名を訊問活捉べ〳〵と指揮をふ〳〵。進む而ふ濃井の備勇士。森尾中嶋。木村。脇坂ハ他ふ方らで戦。ひるるふ。濃井但馬ふ。赤尾美作ふ他ふの者人ハ。柴田。池田。丹羽等ガ隊ふ活捉ふ。木村右郎次郎ハ。稲葉。安藤ガ隊に戦死を。然るふ脇坂甚内。源氏取ふのあるにより。西の国隊を破り。通ふ出んとする所を。本下ガ隊の勇士達快より服を。八方に属て視流〳〵在たりしが。出鐵ふ麻の前を。額ふ表せ〳〵一勇士の西をさ〳〵て弛ぬ紀ふ戦ふ。ふ隊ふ。て服坂ふ〳〵めと。片桐。福島。加藤の三個。馬を駆せく迎ふ。敵の拳止強ふ遂ふ。遠天ふに後面を着ら是。いづく〳〵通ふ方のある紀。速に姓字を号ふ。陣参せよと呼ぶ。れた。甚内赤に怒通

をそあるの顔をとゞめ。腐張く大音あげ。江州濃井家に屈指の一個。脇坂甚内安治なり。色須の戦ひ。敵を欺き。勇士なるを忘れやすると呼ばりて一丈ばかりの敵を捨て。目覚く棚出せる伏助。俄急ふ勇を避く。押ひ去るを加藤福島。鉞夫惑て虎ばかり。打義の輪い人をば刺さを誘ふる馬の鬣着を搦貫ぐすゝ。ほろん。嘲もせぐ逆矢に人馬ともふ外ずを。本村又義丹と大九郎。二重く郷たり。濃井の勇士今ハや彼是議らを失たり。一場の合戦事休たりしが。加藤福島。時相。脇坂甚内を落捨て。秀吉ぶ前に撃居たり。藤吉郎ハ。秀吉の下の縁き蓋世の。勇智略力あり。ゆゝ切ける名人も顕さゞ。今天を期らて紀せん。縛いと行臓ハおりもゝや。怖くべき命ぶ。

家名を達て身の義を。永くふ孫に傳流たゞへ。所信を濃井長政。最期の遺言に各の。死をりて固く止めたるよ。ゝ得ふ名将たりるゆ名。勇士残書ふ情厚く。各をりく徒空に死ぶせん。縛の最惜く。死後まで氣頻玉つるをば。生ゆへく達名せんこと。長政の心にも徳ふぞり。いよく活命せんとゝ。大将の御前ハよりに料理。助命いさせまうゝ。ぞふと盡理をりく流涙。最期訪ふ孫ゆゝ蓋世。脇坂素より大志ありて。恩慮徒ゆゝ勇士ゆれで。今秀吉の孫切ふ心も折け且ハ亦仁心義氣に感服ゆ。天地ふ整て降参ゝ。義に濃井組馬ゆ。赤尾英俗ゆ。三田村左衛門大夫。大聖木左衛ゆ。織田の名士に活捉を。誅せゝるゝ裁断ある。然るふ赤尾英俗ゆ子。虎子代といひるハ享年十有ゆ

木下の三傑両勇
力を勠せず
脇坂甚内を
活捉

歳なるゆゑ。父孫殺の朝ふ除こ。所望しくも只一個。織田の本陣に推参し。猛氣もなく御前ふ出。父ゲ分稽古ゆまりたき義。思入て願ひけるゆゑ。大將信長ゆ是伐所しめされ。樂少年の分伐りつく。歌中をも怖れざる。勇悍の量を感佩せゆ是。おりそて潛然と落涙あり。又なく傷氣なる童ふゆる。勇と孝の達人なれば。望に任せ得よと。ぐーとく。おを〳〵稱英なーたまひ。軍を呼出され。虎子代を以て蒼青せゆる虎子代後ふ孫馬と名のり系統を決なるに備又本下義右卿ハ。淺井家備士の殿授首を。實檢のこと。辯ゆてみち。猛坂甚内を御前ふ伴ひ。降參のうを言狀し。次ふ安治ゲ智勇の量を。詳ふ若用なせーゑ。信長これ伐所しめ。勇士ハ一個たりとも。ども。用ゆ度きとゆるものを。本心忠に傾く。族をいをゆ敬をふ

恩ゲんや。恥命ハ勿論功ふ隨ひよろ〳〵恩賞あるべきぞと。御感の余に甚内ハ心魂ふ徹まるまを。最希く御奉ずし。本下の孫ふ術屬せり。今ハ既ふ江和の地も食慾く織田家ふ歸して漸く平穩きといえども。猶淺井家の殿淺やかりん。よく觀察せゆるこの御下辯ありて。本下義右卿ハ。自ら伐率ひて江州の地を。番人警索せられゆる。菌天も者く甲夕閑なる伐。三両雅ふ路白通ゆし。觀音寺蒲生那也の山下を過る機會。幽數ふ聞ゆる琴の音ありて。ハハ私ふ通ゆる風かと。所意ひつもよく所ふ。澗水石間ふ吟ずるが像く。麋鹿樹の陰を過分て。秋を深ふ感ずるゆ。殊ふ爽に澄渺る時ハ九月も深ゆる。他の心ハ憂ふ通ひく。う得ふ側に武士も劉氣かゆる候機なる上。今琴の音に誘ゆ。まくそを尋行く。源に林

の中にぞ投ぜける

義右衛門倉情再興系極家屬慕田使節

子房云く。鷄鳴山上に登りて。洞簫を吹。悲歌を唱へて。楚の猛勇八千の弟子。ふる離散して。項羽滅亡したりとは宵々とへども。時なれば九月の末にて。勇氣城折く一曲は戰國より聚まで。艷優なる絳の不審うばや。絃を木下逢淀。琴の音韻に響れつゝ。ゆゝしく着まこと。最喬びし。面闕の掾固あり。堀もひまど東西攘まさく。昭天さうの風ふ發たる。本の蓼や鉄る成補ふるうん背門ふ遠ざく着て中まで。大半被まゝ。堞の蹟ふ。本よ衍文ぜ編代せ。墻を掩つる老樹ハ。巣も多く結ぶるにや。義まる枝ハ神さるまでふ。繫ぎて周ふ周をえたり。防垣のうちふい年果に。婦姓の声に

て最義なるが。空蟬ゆうの由を偽ひ。十二の絃に彈和せり。その風騷ハ比良ようなく。雅情ハ琵琶湖より深し。秀吉ぞめ情なれ。紋把駅車に乗る者で。耳傾けて他会なく。月末日来の戦勇もうべき。秋風肌を冒さかど。冷なるをも覚えぬ。ぞして。逆一形に草産なし。所弱まてぞ在たりしが。秀吉諸士を顧て。今に小い悪く。織田家ふ帰屬なりたまべ。深山幽谷ふ。るまぐ。見我君の形領なり。方墨這家を窺ふふ。古民の栖窠とも見えやうべ。歴世なせし郷士にや。黎窠をらげよと面闕ふ遣る。彼車に命じて通声さんまを。門内倉車に喋ぎ記。そそや歌こそ来りなを。拒抗やつと呼さりて。弓弓流を當的なるにぞ。憐男家まハこを見て。それうち投く活投べしと。激音蒐を秀吉制止。疎忽の挙止さべやうべ。まづ孰倫

の住居にや。汎ぬべしとて。一士ふ指揮ふ。大音に呼せ給ふ。
ふまへ横山の城主たる木下藤吉郎秀吉なるが。當家の主へ何
人ぞ。とて。聲所を忘しく。主めたる一個壮士。早奴に命じて
門戸を開き。縛ると出さく。秋中の事也。實否をたらば。野武
士盜賊の類なるんと。防禦の準備なせ。條兵顧覗せ。
遥〜まぐくこれへと待ち給ふなど。秀吉自勢を門外ふ体せ加
羅傘の居家四五輩従へ。引導に立れく後堂ふ通り。設けしる
座に推居り。初対面の稚儀五ふ畢まく。木下主を熟く相に。
年庚ハ稍二十ゲ剃を四五を紙ける相好にく。色白〜枝長く。
猛〜ざれとも威を含ろく。尋常なる骨法なり。秀吉主ふ
り賜支をだも棄ることなれ大將也。ゆもく態勢に含教なし

いろふる人ぞと同汎ふれで。彼者も亦恭しく謂幾々の世ふふ
ハ原當國の古獲佐く木の一族観音寺城主たりし。京極武義ち
高吉の子息高次といふ者なり。旗本なる淺井がるふ。不領を
痛く狭めらを。又武義ち没して後ハ。俺们兄弟二個あまこども幼
ふして活計しがく。零落なして遠ふ閑居し。附運を渓こと十四年
名通武術を錬磨しく。所志ハ屈曲せびとらくども。大綜たる六角氏
格の係くに衰微しけまべ其門家たるつが倫業。身を達家浅
興さんこと。変ても得ぐこと附なんぬるを。と坐ふ思ひ諦めて只顧
天の附に順ひ。世の盛衰を見聞るふ朝倉ごと氏大家さろ運
盡ぬまハ羅露と共ふ。消る名のあるものを。栖家が倫業何て負
久ハ零落閑居の分れ安くて。接戦疲労の苦悩もなく。徒来庭臥

○澤井雅記 淡海温故録に云ふ京極氏発ちる秀吉とありしを迎成又家潘ふハ長つ古る表とあり去る古る表ハ別人なり帰ふる秀吉を見ふく浜と見る欤

京極の妹女
琴の韻をして
藤吉郎
秀吉を
慕着
せしむ

安素なり。然いふりの苟も。武門に生るゝのさゝらに。我國の世ふあ
まるなり。屈身して年波を送ること。柔弱未練の所為なるべいかもな
して志を遂果せてくれが。婦ハ信長の。常前よろしく木下殿の推
挙に憑く。俺們兄弟の家名浅興に。端ともなさせ玉たまへ。深恩
又母にも偖るなりと零を落たる始終を門譚。誠心をりく佑頼々る
ふど。秀吉熟これを聞く。備ハ京極の人々なるゝ。數箇年況淪
しのふこと。さぞかし辛劬にくあり法らん。既ふ濃井家滅亡して。
江州總く信長のふ掌ドたる時こそ幸なれ。京極家再興の
方便をもふもはらざるめり。近日信長當國の。政事を命出さる為
なれば。其時ら弟しく披露しまうさん。兄弟喪ハいづくにやと汎ふ
高次腰淋く。舎弟高知なるべに妹。は歳十六歳なりゝるを呼出さ

をく対面さるに。秀吉妹を見くゆるべ。容貌さなかゝ美麗柳慈
なるに対して手を取られた。楊氏李氏なる殿を抱ち。ふ君小町も
扇法掩ふいとも愛れる服なりしゝ。水ハにも心動せる。大丈夫の
秀吉も。忽地魂氣を奪れく。若恵も忘れく惆然たり。姑く有
て為吉帝。最前琴を弾せ。若ハ這婦人ふさはゝ法るやと汎絲
なる由を言次養へく。いかも賢吉家しゆふぐとりふ秀吉金
語く。慈慕のかりひを添ふなせ。が。碁碑ふ富たる秀吉なれた。這婦
人をりくまに納んふハ言次言新を推挙して。立身さるにハ志うゝ
と決意し。屑ふあらざるども。乃郎保意まうしうハ。舊領安達相
遠ある中ド。一夜日波所治あるを。かゝるに吉左右まうさんにと堅く契
約なりおそり。新も深なるを秀吉も。別辞を報く帰りなる。恐かど

（小牧長久手の戦）

（小牧長久手の戦）家康と秀吉の和睦成りて相続いて信長の遺領を分つ

小信長。江州の領を平定し給ひ。改年伐命属さるゝまゝ小谷山の一城を。淺井の舊領三郡（淺井修番坂田の三郡）の多寡十二万石の地を添て。木下藤吉郎に授賜せらる。秀吉冥加のかゞ伐拜謝し。多年の功労を顕りたるゝに依て。先領合せ二十万餘石にして。柴田。佐久間も及ばざる。大領を賜ひ昇進する。この胸本下頭てより。懷かゝる。京極が領。良節合ずして言状もなく。江州の地は剣草。京極なる家に舊領にして。國民今ふかい連こと。先主の恩化を遠慕忘ぬまゝ。京極の家を再興ありて。仁義を施しゆひなど。江州いよ〳〵静穏ふして。民の心も安寧なるゝ。安便京極なる者が子息。甫生那に藝張しければ。恰に德を施さゞ。彼家を達むなるゝ。國民共ふ安康かゝんと願ふ上る。伐信長兄弟ふ対面ありて。事に懇何をうけさせるゝ。江州の地を賜へ

（京極なる家其子なる成吉なる者と相続いたさ江氏依をもって京極氏の領とさへし）

（小谷山の二村と多賀彦根中荘をも）

ら給（後年江州大津を領し大津宰相と称）家を達さゝ。ひなるゝに。兄弟多年の愁眉を開け。世に出たりしも単ふ是。木下庚の懇切なりとて。淺ゆゝ熟交せ〳〵れり。そゝのそなるゝ。國民近京極再興を大ふ歓び。秀吉の仁心を感称し。こゝ。江北以前ふ信〳〵。平安豊樂を極めたり。秀吉遂に帰る次ゞ妹を懇望ありて。ふ若ふ迎帰し。義吉命の服妻と〳〵。羨急々ゞ。りゆうけゝ。（淺ふ私の尤敬と称もるゝなる夫人なり）城ふ人の時を得て。六万石を意く意の如く。謀る所圖ふ苟りく。自己仁義の名誉得るのゝ。情意を遂て国を富しめ。國民の心和輭ぐ。領地ゝ〳〵平穏なる事。こゝ天恵の智といふ。ゝ。然ば信長甚余の人を。恩賞せよと命出され坂田郡の分地ふかいく。六万石を城次命ふ賜り。志賀郡ふく二万二千石を。所関港なるふ賜ふ。新荘の城に属ら

きて。磯野丹波守攘揚す。虎御前山の城い破却せ。朝まで殘る限もなく。國中の政道相整ひ。同年九月六日をもつて。諸勢を率して嶺く発と。波阜へ進軍まし〳〵なり。浩りなる程ふ織田家の武威。近江越前いふもさらなり。近國に敬せる輩い徒の一個もあらざりて。威風凜〻たりなる由。幕下に屬せる衆も揚て羨るふいとなり。茲に播州姫路の城主小寺藤兵衛政職といふ者あり。其年親王の後胤なり村上源氏赤松家の嫡流なり。武勇に長ト一族雄ドもあまたあれども。中國ふい毛利有り。四國に三好長慶我邦あり。彼和ふ深田直家いりて。四方なる見大敬なる由。ふち政職一家ふ〻く。出頭せる事ありがたれを。万元武功の家に勤カし。後の天過を拔きんと一族諸士を呼集め。今國〻ふ智勇ある

將士悍しく蜂起せるが。武將となるべき器量の人い誰ふやいるとて。訊ねるふ諸士なる翻を同して當時国第の豪家といふい中國に於る毛利なり吉川の智勇小早川の仁德よく輝元を補弼して。四方不敬の名將なり。此ふ勤カして伝義を竭さびいるる敬ふ對ふ。ふとくも。毛利の援護ありるものを。怖るる不るるべしといふ説同席に列せる。黒田官兵衛孝高（実名は氏職。通称は官兵衛。孝高は法名。宗活と称す。黒田と号す。官名は孝高。宗活は法名。黒田は姓。官兵衛は通称。孝高は実名。官兵衛は通称。孝高は実名。宗活は法名。黒田は姓。）七代黒田下野守重隆の男。織隆なり。）といふ者あり。才智明叡にして。軍略ふ賢く。兵書に遊せし。勇猛を双の武士なり。それのみならず。義を利して多言なるべ。慎深き人なるが。進出て事〻しくなる事。諸士の美見利ありといへども。熟く思慮を廻らせ。進日天下に対を執つきこの人彼阜の信長なるべ。毛利家の武威壮なれども。いまだ織田に及ばず

くんや。信長は尾州の三郡より起りて。十年満たぬ其中に。諸国の大敵を滅ぼし。公方を輔佐して上洛なし。又織田を憎む。ハかゝるべき勢。あれや近来足利家の権威ようやく衰へ天下に武将たゞ己れ思い。信長のわろみるべし。是を恭る胸へ。発く織田家ふ義撫して。信義を通じ。まさん緯。最万全なりと。盡理の言葉ふ政職帰依し。足下の解理おこなに偽り。発く織田家へ使者を遣さく。勤力の筆を通じたし。然るふ遠遠の使者なるものハ別人ふくハ孫ふ。是下万元波阜へ。新紀。信長にとが心服を言約らべし。且ハ又織田家の備士の。弓矢量をも。窺ひ来まと言撫し。紀地小寺の苗字を嫌りく。天正元年六月下旬。播州神崎を義是ふ。上方當て急がせたり。然るふ其頃公方家ふハ。暮び神野心の事ありて

京都強初ゆ。なる也。官兵衛を遣て池ふ江州多る小谷の城（江州一国の義に依て義右小谷の城をなる）ふ新て。木下藤吉郎に対面し。政職の意新を係ふ濃。織田家へ勤力の者を借る。秀吉渡りなく快悦なり。若英のありけ郷食意し く後。波阜に誘ひ。仔細に信長一言状せしく。もふ。もち孝えに対面ゆり。神懇の命せありて。通留ある蔑ようみ。藤吉郎と一齊ふ小谷の城に急帰。日夜軍法なしなるが。柔田が智計援解なる に。信義の心薬りなれ。秀吉密にこれを鎖び。西国征伐の案内者にハこを。竟の人なりと。随分紳士し。摩信に左右ふ公方家の落著ありて。濃牛。朝倉も滅亡しなれば。官兵衛こを改事軍法。皆悉く見聞しつ。肝ふ徹して感服なし。彩てハいく信長こを天下の武将なるらあと心を変してありなるうちふ。信長ようり瞻を揚ハ

りけるバ。ひさでのとり頂戴して。攝州御崎へ帰り給ふ。是食未下の深慮にて。織田家の武威を中國まで恥めさんなれ料理なり。

繪本豊臣勲功記四編卷之五終